
冗談と剣

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冗談と剣

【Nコード】

N0291P

【作者名】

閑野 寅歩

【あらすじ】

ひよんなことから香霖堂にある、古びた剣。それは霖之助が、魔理沙の鉄くずを引き取った時についてきたもの。

霖之助はこの剣に『霧雨の剣』と名前をつけ。大した価値もない古びた剣と周囲には説明していたが。店に訪れた藍はその正体をあつさり見抜く。一気に気まずい空気になる二人の間に、場を和ませようとお互い努力しているのか、いないのか、ぎこちない冗談が飛び交い始める…。

藍霖のカップリング小説です。あんまり甘々な展開はないです。

(前書き)

この小説は東方projectの森近霖之助×八雲藍のカップリング小説です。カップリングがNGな方にはお勧めできません。ご了承ください。

さらに『草薙の剣』に関してかなり独自解釈が含まれています。その点もご了承の上、拙作を楽しんでいただければ幸いです。では、どうぞ。

『冗談と剣』

「霖之助さん、その剣はなんですか？」

ある日藍は、香霖堂の一角にある古びた刀を指してそう言った。

「う、」

それに対して、霖之助は明らかに「まずいな」という表情をしながら、短いため息ともつかない声をもらした。

九尾の鋭い追及の目が、霖之助を射抜いていた。

わずかの間、その後霖之助が口を開いた。

「…ああ、いい剣だろう？この間魔理沙の鉄くずを引き取ったとき、偶然ついてきてね…名も無い剣なんだが、どこか光るものがあるって——」

「嘘ですね？」

つらつらと弁解を始めた霖之助を、藍の一言が一蹴する。

「『ひびごろかね緋々色金』の剣ですか。さぞ由緒正しい剣なんでしょうね？」
にたりとしたいやらしい笑みを浮かべながら、藍は言う。普段の徹と言っても過言ではない彼女にとって、まず平常は見せることの無い表情である。

日ごろが人間くさい彼女にとっては、珍しく妖怪らしい表情であるとも言える。

「…君に嘘はつけないな」

「残念ながら、紫様にもつきませんよ」

観念したような霖之助のつぶやきに、あのお方に隠し事など不可

能です。と付け加えて藍が言う。

霖之助はその『剣』について、今藍にされているように、紫から追及された時のことを考えていた。

そして最初からわかつていたような答えにたどり着く。

「あの妖怪に尋問されるのはごめんだな」

「私はその妖怪の式なんですが」

苦い顔の霖之助、それにつられて苦笑しながら藍が応える。

「君のご主人よりはいくらか組みし易いよ」

「なめられたものですね、私は九尾ですよ？」

「九尾だから、なんだい」

藍の言葉尻をつかまえて、霖之助が言う。多少ひっかかる表現であつたからだ。

「半人半妖の一人や二人、どうにでもできるという訳です」

それにしれっと藍が応える。面白いぐらいに普通の表情で、さぞ当然だと言わんばかりに。

「笑えない冗談だな」

ぼそっと、つぶやく。

「冗談じゃないですよ。霖之助さん」

そこへ、突き刺さるように言葉が飛んでくる。

「まあ待ってくれ、何もその剣があるからと言って君たちが敵になることも無いだろう？」

少しの沈黙の後、耐えかねたように霖之助が弁解し始めた。

「そうですね、この剣を持っていると言うだけなら敵にはなりえません」

極めて冷静な答えが返ってくる。それは霖之助に、あらかじめ出

る答えの決まってる数式を起想させた。

見るからにつんとした藍に、再び質問をぶつける。

「じゃあどうしてそんなに剣について詰問するんだい？」

すると藍は、少しためらいの表情を見せ。

「：隠してるからですよ」

と答えた。

どこか哀愁の漂った口ぶりで。

「剣の正体を、ということかな？」

確認するような霖之助の言葉に、藍は首を横に振った。

「それですけど違います。私に、です」

私に、という言葉に当然の如く引っかかり。再び質問をぶつける。彼女は どうしてそれが不服なのだろうと、図りかねながら。

「どうして剣についていちいち君に申告しなければいけないんだい？別にいいだろう」

すぐに反応があった。藍は信じられない、という表情をするや否や。短く怒気を含んだ言葉を発した。

「本気で言ってます？」

怒っているようだが、どうして怒っているのか霖之助にはさっぱりわからなかった。

「なぜそんなことを聞くんだい」

すると、いらいらしたように藍が問い返してきた。

「この剣がなんだかわかっているでしょう？」

「もちろん」

わからないはずもなかった。

『草薙の剣』くさなぎのつるぎ

そう呼ばれる、伝説の剣。天下を取る程度の力を持つ、強力な剣だ。

ただし、誰にでも扱えるわけではないという注釈は付くが。

「じゃあ、仮にその剣を使ったらどうなると思います？」

「…？」

この場合の「使う」とは、正しい方法で、ということ。つまりはこの『剣』で言うと、『剣』が使用者を『認めた』場合に該当する。…つまり、『草薙の剣』が霖之助を『天下を取る者』として認めることを意味する。

正確には剣を授けた天が認めるのだが、それはそれでどちらでもいい。

「…日本書紀か、古事記はご存知で？」

「それはもちろん」

幻想郷が元あった国では、欠かせない有名古典である。

「『草薙の剣』は、妖を払う剣です」

その言葉で、ふと思いついたふしが霖之助に出てきた。先に出た古典における、『草薙の剣』のことである。

『草薙の剣』は本来妖怪の体から出てきたものだが、その後は妖怪を倒すために使われている。

剣を手に入れたのはスサノオ、その後持ち主は変わって日本武尊になったが、その剣で倒すのはたいがい妖怪であった。その理由は、当時この国では妖怪が跋扈しており、『天下を取る』ために妖怪を倒すことが必要であったのだろう。その剣自身の力を果たすために、妖怪たちが倒されたとも解釈できる。

よくよく考えてみると、今の幻想郷はそのまま、その当時のかの国のままではないか、と。

「もしも、もしもですよ、あなたがこの剣を使おうなどとした時。この店に来ていた数多の妖怪たちは、この店に來れなくなるでしょう。いえ、近づけなくなります。さらにそれは、紫様も例外ではないでしょう」

妖怪が跋扈している以上の状況である幻想郷において、この剣を使おうものなら、確かに妖怪を倒し続けねばならない。そしてそれは『天下を取る程度の能力』を持つこの剣においては、その力を発

揮するために行う必須事項になる。

天下を取るために、妖怪を排除することが必要だからである。それは霖之助にとって、わかりきっているようで、よくわかっていなかった盲点であった。

「……それと、私も。例外にはなりません……」

九尾である彼女は当然妖怪に分類される、いかに妖怪らしい振る舞いをしないとと言っても。妖怪は妖怪だ。

霖之助がこの剣を使えば、倒される側、になるのだろう。

だが、その事実を突きつけられただけでは。なんとなく負けたような気がした霖之助は少しやり返してやろうと考えた。

「……そうだね。君はともかく、紫が来なくなるなら使ってもいいかもしれないね」

しれっと言ってみる。

それに対する藍の反応は予想以上に最悪であった。

「な……!」

言葉も無いように、目を見開いて霖之助を凝視する。

やりかえしてやろうなんて考えなければ良かったと、霖之助は心底後悔した。

「冗談だよ」

あわてて霖之助が言う。ただしつとめて冷静に。

「……笑えない冗談ですね」

霖之助から目を逸らし、藍は他人事のように言った。

「お互い様さ」

小さな反抗の言葉を最後に、二人はまた沈黙へと突入した。

「……その剣。使うんですか」

もはや永久に破れないかと思われた沈黙は、意外にも藍が破った。その視線は霖之助を捕らえておらず、あさつての方向を見ながらの発言であったのだが。どうやら先ほどの冗談がよほど気に食わなかったらしい。

「使わない、とは言い切れないかもしれないな」

霖之助は言葉を濁した。正直、あらゆる意味で自信が無かった。

「あなたは半人半妖ですから、使いたくても使えないんじゃないですか」

目を逸らしたままの藍にしれっと、第一に考えていた心配事を指摘される。やはり藍は頭の回転が早い、とか思いながら霖之助は返した。

「そうかもしれないね、でも使えないと断定されたわけじゃない」結果的にさらに濁った答えとなった。

しかし突き詰めればそうなのである。いまのところ霖之助に『天下を取る』つもりが本気で無いだけで、もしも霖之助が強く望めば、『草薙の剣』が反応しその力を発揮するようになるかもしれない。霖之助は到底その器ではないと判定され、そうでないかもしれない。

また、神器は純粹な意味での『人間』にしか扱えないのではないのか、ということも考えられる。半人半妖ではその用件を満たさないのではないか？しかしそれもまた根拠が無い。そもそも半人半妖が神器を所持した事自体が稀だろう。

結局、わからないのである。

「……………」

「……………」

そうして再び、長い沈黙に突入するかと思われた。

視線も会話もかみ合わない二人であったが、今度は霖之助から沈黙を破った。

「でも、当分は使わないよ」

相変わらずあさつての方を向く藍を見据えながら言う。聞いているかどうか微妙であったが、大きな帽子で隠している耳の部分がぴ

くりと動いたので、聞いているらしいと霖之助は判断した。

「妖怪のお得意様が店に来なくなるのは困るしね。それに、紫が来なくなるのはうれしいが…」

彼女の機嫌の悪さを考慮して、少し言葉を選びながら。何を言え
ばいいのか、吟味しながら。

「ついでに君も来れなくなってしまうのは、嫌だからね」
少し間をおいて、さらりと言ってみる。

「えっ…」

驚いた様子の藍が、霖之助へと視線を移す。

「せっかくできたお得意様を手放すわけには行かないさ」

「あ…、はあ。」

が、次の一言で失望したようにまた視線をそらした。

「それも、特別な、お得意様をね」

そのそっぽを向いた耳に、そっと届くように。

今度は大して動揺を見せなかった彼女だったが、それでも耳がぴ
くりと、先ほどよりもよほど大きく動いたのを見逃さなかった。

「…笑えない冗談ですね」

心なしか、少し顔を赤らめながら藍が言った。

もっともそれは、霖之助の単なる勘違いかもしれなかったが。

しかし次の一言で、それは勘違いでなかったと証明されたのだっ
た。

「冗談ではないよ、藍」

日が沈み、あたりが暗くなってからも。香霖堂の灯りは消えることは無い。

それはそれでいつものことだが、今日は今日とて、楽しそうな歓談の声が店の外まで聞こえていた。

ひよっとすると、店の壁が薄いだけのなのかもしれないが、それはそれとして。

「でも私がここに来るということは、紫様も相変わらず来られると言うことになりますがいんですか？」

まだ藍の不機嫌は完全に直っているわけではなかったが。ちゃんと霖之助と目を合わせて話すあたり、大分改善されたようであった。というよりは、多少意地の悪い質問をするあたり。藍的にはかなり機嫌がいい証拠である。

「…君は、人がどうして生きてるか知ってるかい？」

霖之助は少し考えて、ふとそんなことを言った。

「え？」

あまりに変化球すぎて、藍がその意味を取りかねる。

外の書物から、何か入れ知恵でもあったのだろうかと思いついて藍が考えていると、霖之助がゆっくり言葉を続けた。

「生きる喜びが、それに伴う苦しみを上回っているからさ」

その意味は、いまさら問い返す必要も無く二人の間に染み渡った。

が、多少の余韻の中。霖之助がぼそつと言った。

「……まあ、僕は半人だからなんとも言えないがね」

「ぶちこわしですよ、霖之助さん」

あきれたような藍のつつこみの後、二人は互いに笑いあった。

決して豪快な笑いではないが、笑い合う二人は、それが最高に幸せな瞬間だとわかっていた。

「そのあたりが半分ずつの宿命さ、どっちにもなりきれない。何事もはつきりやりきれないのさ」

しばらくして、霖之助がそんなことを言った。

笑いながらであったが、多少本音も混じっていた。

「いいんですよ、そんな霖之助さんで」

ゆったりと微笑みながら、藍は答えた。

「そうかい？」

それが冗談でもなんでもないということは、いまさら聞くまでも無かった。

（後書き）

「笑えない冗談ですね」はなんとなく藍がよく使いそうな言葉なので、今回のお話の軸にしました。

霖之助も藍も知的なキャラなので、周囲からだとかそういう意味なのかさっぱりわからん高度な掛け合いとかするのかなとか思ってた書き始めたはずだったんですが。気が付くとお互い野暮なことつっこみまくって普通の会話になってますね（笑）

そんな野暮な藍霖なわけですが、いわゆる霖之助勢界限でもほとんど見かけない希少種族です。

いやまあ、原作設定から何か接点があるんかいと突っ込まれれば痛いにもほどがあるという最大の弱点に加え。近頃は少し治まったものの、いわゆる「東方でNCPをやるなよ」というような、霖系批判も未だ根強く、なかなか強く主張できないカプではあります。

まあ、そんなこと気にせず主張してる阿呆はここにおるのですが

（笑）

何と言うべきか、最高じゃありませんか、この二人。夫婦に似合いだと思えてならないんですよ。

と、某大手様のところで藍霖のSSを読んだのがきっかけで思い始め、今に至ります。

もとより、あまりあるジャンルでないのも、名前を伏せても調べればあっさり見つかると思いますが念のため（

なんで今回この後書きにこんなことを書くかと言うと、今回で藍霖は三作目。

これはその影響をもらに受けたSS書きさんが書いた藍霖作品数と同じなんですよ。

個人的にもものすごくリスペクトしているというか、今小説を書い

ているのはその人のお陰というか。ともかく大きく（一方通行ですが）恩のある方なので、その記念に書いております。

それに、これで自分の作品の中でも藍霖が飛びぬけて多くなったので。強く藍霖が好きだと主張できるという記念でもあります（いや、最初の朱鷺霖の評判があまりによく、その後の藍霖があまり評判よくなかったんで、作品数だけでも多くないと証明にならないあと個人的に心配していただけなんですが（笑）

ともかく、これから藍霖で書きたいネタはたくさんあるので、こつこつ書いていきたいと思います。

周囲には、「生涯で藍霖を100書くまでは死ねない」とか公言しているのも、それを達成するまで死ねません（笑）

つたない文章と、作品を読んでくださった方に与えるにはあまりに唐突で読むのも飽きる長つたらしい後書きでしたが。もしこの藍霖が気に入っていただけたようでしたら、どうぞこれからも藍霖をよろしく願います。

できればこの不肖・閑野も併せてよろしく願います（

あ、感想もお気軽にどうぞ。なにか気が付いたことがあった方も、気軽に指摘してきして下さると助かります。

最後に、この拙作を読んでいただき本当にありがとうございます。
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0291p/>

冗談と剣

2010年11月20日22時28分発行